

## エ ピ ロ ー グ

この大地には幾多の死者の魂が埋もれている。そして同時に、この大地は幾多の人の生を支えている。

忠類へ移住して50年。私もこの村に支えられて生き、この村の土に還ろうとしている。辛いこともやるせないこともあったはずなのに、死に向かう床に着いて思い出すのは、多くの人に助けられたことと楽しかったことばかりだ。

仲間や近隣の人々との共同作業や語らい。

子ども達の笑顔を見たくて取り組んだPTA活動や子ども会活動。

地域振興を目指して行ったイベント。

真剣に議論した幕別町との合併。

地域の声を町政に届けようと奔走した選挙活動。

志を同じくする人々と力を合わせ汗を流すことは楽しかったが、果たして村のために役に立ったのだろうか。過疎が進み、街路を歩く人の姿も見られなくなった今、自分達の行った活動は自己満足だったのかと寂しく思うこともある。

「お父さん…、お父さん…」遠くで女の人の声がする。

「その声はハナコじゃないか。札幌へ嫁に行ったハナコじゃないか。何故そんなに悲しげに呼ぶんだ。」

「ハナコ…。保育所の夏祭り楽しかったね。花火きれいだったね。小学校の運動会何種目も出て忙しかったね。高校への通学へこたれないでがんばったね。大学受験よく乗り越えたね。よい男性と巡り合って幸せだったね。」

「お父さん…、ありがとう…。」

「ハナコがいたから父さんは幸せだった。ありがとうを言うのは父さんの方だ。」

「人生の幸せは自分一人で実現できるものではない。他人の幸せに助力することの中に自分の幸せがあるのだろう。そう考えれば、家族のため、村のためと今日までやってきたことは無駄ではなかったか。」

「ハナコよ、他人と関わることを避けてはいけな



「夕日に照らされた丸山」

子ども達の歓声が響くナウマン公園の景色が見える。濃い緑に覆われた神秘の山、丸山の姿が見える。何だか薄暗くなってきたな。もう日が暮れるか…。丸山の上空に二つの星が輝いている。大きな星とそれに寄り添うように小さな星。もう夜になったか…。

その時、スーッと吹き抜ける風を感じた。そして、プツンと視界が暗転した。

\* この物語はフィクションです。